歌の周辺

昭和61年の作。新宿駅の西口に小さな公園のような広場があった。樹木は生えていず、水の流れる設備があった。その広場は、周りを高い建造物に取り囲まれていて地下のように見えたから「地下」という言葉を使ったのだと思う。水の流れる音を聴いて、ふと難破船が波に洗われている浜辺の光景を思い浮かべ、この歌を作った。たぶん都市の荒涼感を表現したくて詠んだ歌だと思う。今、当時の広場の光景をきちんと思い出せないから、もしかするとこれは現実の風景でなく、私の脳裏に浮かんだ架空の風景を詠んだ歌だったかもしれない。

（高野公彦）

（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・45

新宿の地下広場ふかく夕日さし破船を洗ふごとき水音

――『雨月』

【鑑賞】都心の地下広場から喧噪が消え、水音だけがちいさく聞こえる。早朝から深夜まで行き交っていた夥しい人びとはどこへ行ったのだろう。「破船」とはなんだろう。自然の猛威に破壊された、あるいは舵取りを誤って座礁した船。地下広場に差し込んだ夕日が、この世の終わりを作者に見せたのだろうか。人の痕跡を消すように、コンクリートのうえを静かに水が流れている。（坪井真里）

ふるさとコレクション——216

諫早の眼鏡橋（長崎県諫早市）

「いさはやのめがねばし　いきもどりすれば　おもしろかなり」これは諫早地方で古くから親しまれてきた数え唄である。現在眼鏡橋は，戦国時代の山城跡を整備した諫早公園の中にあるが，もともとは公園のそばを流れる本明川（ほんみょうがわ）に架かっていた。市の中心を流れる本明川は〈暴れ川〉と言われ，昔から氾濫をくり返し，そのつど橋は流失していた。人々は飛び石で川を渡り凌いでいたが，壊れない橋を造りたいという切実な願いで，天保10年（1889年）に領主領民総力をあげ完成したのが眼鏡橋である。長さ50m，幅5.5m。人柱伝説（僧侶とも少女だったとも伝えられる）の残る二連アーチ式の石橋は，それから流されることはなかった。

ところが昭和32年（1957年）7月集中豪雨による水害が発生。眼鏡橋が堅牢で壊れなかったためにかえって流木や瓦礫をせき止め，市街地への被害を拡大させた。犠牲者は600名に至る諫早大水害の惨事となった。

その後水害の復興事業で本明川の川幅を拡張，橋は諫早公園に移築復元された。眼鏡橋は今も美しい佇まいを池の面に映している。

（写真・解説：勝木ひさ子）